# 養老川流域の歴史散歩
## ―鎌倉街道と養老の地―

総の国をかたる会
白鳥　元治

### １．はじめに―高坂と鎌倉街道―

中高根の常住寺の下は、「寺の下」という。自治会館の脇の急坂な曲がりくねった坂を上ると光風台団地である。地元の古老の中には、この道を鎌倉街道という者もいた。中高根の「根」は、丘陵地の麓からきているらしい。ゴルフ場や団地ができる以前の高坂は、山深い丘陵地台地でありこの丘陵地の付け根に点々と集落を形成してきた。中高根・上高根だけでなく、かつては下高根という地名もあった。高坂という地名は、全国各地に存在する。その呼称に「タカサカ」とか「コウサカ」とかがあるが、市原の高坂は、「コウザカ」と濁音である。関西の大阪はもともと坂の多い地で、初めは単に坂とだけ言っていたようである。君津市にも、「コウサカ」という地がある。**高坂という地名の由来は、「急な傾斜地で坂のある地」**という地形からきているようだ。団地の一段と高い奥は旧高坂集落で、昔は「寺の下」の道斜面を上り、光風台小学校裏のゴルフ場との間の道(通称鎌倉街道)からの道と繋がっていた。かつてゴルフ場内は一面の畑で、一本松と称する塚があった。この辺りで、高坂・分目・神代と立野から海保そして姉崎方面と古道が枝分かれしていた。通称鎌倉街道と呼ばれていた古道が、上総の丘陵地、袖ヶ浦台地から東の台地の先端になる高坂で枝分かれして、平坦地へと坂を下っていたのだ。その先には、今富廃寺跡・推定される海上郡衙・上総国分寺跡・上総国府(郡本辺・村上地域あたりか、いくつかの説あり)、そして姉崎神社が存在している。

かつて、分目住人の古老から聞いた話がある。「戦後まもなくまで地の者は、一本松を目安にしてそこから、昔の道を自転車で、木更津方面へと抜けたものだ」。鎌倉街道は、高坂の台地と立野から市原市と袖ケ浦市の境界を辿っていく道である。律令時代でいえば、上総国の海上郡と望陀郡の境を進む。台地の先端の袖ヶ浦公園・**飯富神社に至り**、木更津から海路三浦半島の横浜市金沢区**六浦**市に向かっていた。木更津の貝淵

木更津市烏田の道標

町に、字名「渡海面」がある。鎌倉街道は御家人の居住地から、「いざ鎌倉」の時に馳せ参じる軍用道路であった。鎌倉期に整備されたであろうが、それ以前の古代からの重要道路であった。鎌倉街道として世に知られるようになったのは、戦前に活躍した郷土史家「小熊吉蔵」氏が、木更津市烏田曲がり坂(中烏田)にある石仏の「鎌倉道」という道標がきっかけで、古道の研究を始めたという。調べていくうちに、鎌倉街道に関係した地名があることも分かってきた。袖ヶ浦市野田字鎌倉街道・袖ヶ浦市蔵波字鎌倉街道・市原市立野字鎌倉街道がある。鎌倉街道と接続する中高根と旧戸田村の地籍内に字大街道があり、立野の台地と接する地の今富から海保へと抜ける地に、字大道がある。市原茂原線と姉崎神社のある台地から急坂を下り、明神小学校前からの道とぶつかる十字路から、姉崎の街中を通る五井方面へと向かう県道 24 号線に出るところは、**「大道下」**という地でバス停名になっている。高坂・立野台地を下った先の養老川対岸の地「小折」は、「郡」からきているのではないかと指摘したのは、「小熊吉蔵」であった。鎌倉街道は、高坂の台地の急斜面を枝道となって下り、上総の国府方面へと向かう入口の地域でもあり出口であったともといえる。彼の調査報告書中に「木更津町貝淵町の人伊藤亀之助の調査により、**貝淵の南字「渡海面」**と称する地を知り踏査を試みしに前述**中烏田示道標**の示せるものも平岡根形方面より来れる鎌倉街道にもつながる此の渡海面より乗船して、彼の地赴くこと確かなり。・・・・・・・木更津より乗船して何れの地に上陸せしかは、「廻國雑記」(中世の紀行文)示す所により知ることを得たり」・「～浦川の湊といへるとし所へ至る。ここは昔頼朝郷の鎌倉に住ませて給ふとき、**金沢**・榎戸・浦河として三つ湊なりけるとか云々～」とある。

また沙石集に(鎌倉時代に書かれた説話集)に、上総の国の高滝という処の地頭が、一人娘とく熊野初詣をした話である。この娘をみそめた熊野の阿闍梨が、娘の住む上総の地に下るのである。そして神奈川の**六浦**というところで渡海の船を待つが、浜に伏して寝てしまい夢をみる・・・・・という話である。この話からも、全国各地から上総の地へと行くには、三浦半島の金沢の六浦という湊が広く知れていたことと分かる。金沢とは、六浦の湊があり中世には大いに栄えた。後鳥羽上皇との承久の変後、源氏は滅亡しその後、御成敗式目を制定した北条政権 110 年続いた強力な政権であった。鎌倉時代の北条氏の一族である金沢北条氏が、武蔵国久良岐郡六浦荘金沢郷を領有したことでその地名が家名の由来とされている。以降、鎌倉街道を通して北条氏と上総国、今の三和地域との関りは深いものがあったであろうと思われる。さらに調査報告書に、「**大街道**とは甲の国府から乙の国府に至る昔の国道にして其の中間各部の郡家所在地を通過するを常とせり・・・・・」といった記載もみられる。

## 2　養老という地と北条氏

鶴峯神社

光風台団地の下は、南に向かって水田が広がる。この水田へと平坦地の一角が、東に突き出して**鶴峯神社**が鎮座する。鳥居の脇に神社の由来を記した案内板がある。「当社は後宇多帝建治３年(1277)本宮宇佐八幡の御分霊を戴き、大江朝臣妙彌が与宇呂宇新八幡宮として勧請、号を米山代鶴峯八幡宮と称して、鎮斎されたのが始まりと伝えられています～」とある。時代は、中国の元の軍隊が、日本に来襲した元寇といわれる事件の頃である。国難といわれながら、北条氏の得宗権力が強化されていった時代でもあった。「与宇呂宇」という漢字表記であるが、「与宇呂保」のことだろうと思われるのだが。「保」とは、海保の「保」と同じで、平安時代末期に誕生した新しい行政区画である。

平安時代以降、古代からの土地制度が崩れ、荘園という国に税を払わなくてもよい私有地が誕生して複雑化していった。耕田を有力な貴族や寺社に寄進したりして、所有権を保証(預所)してもらったのが荘園である。そして地方の開発領主は農民から地代をとったり、荘園の下司職を担ったりするものいたし、寄進先の領家から派遣されたりすることもあった。だがすべての農地が荘園になってしまったわけでなく、国衙領と荘園と入り混じって複雑であった。地方の領主(豪族)の中には、有力者に土地を寄進しないで国府の管轄下のもとにいる者も多くいた。豪族の中には、一部荘園・一部国衙領(公領)にと上手に使い分けている者もいた。自分の領地が荘園であるか、国衙領であるかに関わらず開発領主(豪族)たちは、耕田を私有化しながら自立し権利を守るために武装していった。武士といわれる者の出現である。そして互いに団結するために、親戚同士になったり、身分の高い人と親戚関係になることを進めていった。そして後年、大小の武士団が発生していく。しかし農地の寄進先の貴族や寺社の力が弱くなったり、国司(目代・国司の代理)替わったりして途端に立場が弱くなると、領地を奪われたり、重い税に変更になったりして、不安定になり争いも起こったりした。よく知れるのが、千葉常重が寄進した相馬御厨、東庄をめぐる争いがある。源頼朝は「武士たちの権利を守る」ことを表明し実行していったからこそ、関東のほとんどの武士たちは、挙兵軍に加わっていったといえる。

**「与宇呂保」**のことである。国司支配下の国衙領を開発し、再編成されて生まれた行政単位であるといってよい。中世を知る文書として知られる金沢文書の中に「与宇呂保」という記載がある。光風台団地下の常住寺が、鎌倉幕府執権北条氏の菩提寺の末寺であり、上総国の祈祷寺であったことから、**「上総国与宇呂保浄住寺祈祷所寄進状案」**（観応３年・1352 年)という文書が残っている。祈禱の恩賞として、所領の寄進を足利尊氏に願い出たものである。また「称名寺々領年貢米注文」「称名寺用配分置文」（年未詳)という文書にも「与宇呂保」という記載が窺がわれる。北条氏一族金沢氏が、所領六浦荘金沢（現横浜市

金沢区）に称名寺を建立し、また「与宇呂保」にも寺領があったことから、報告したものである。時代は異なるが、海保の遍照院棟札に上総国与宇呂市原郡海保村・・・「慶長 7 年季壬卯月 18 日」ともある。また醍醐寺三宝院文書の「市原八幡宮国役庄役事」というものにも、「与宇呂」という文字が見られるという。八幡宮の荘園に関わる役(エキ)、ことであろうか。与宇呂保の範囲は明らかでないが、中高根や海保を含むかなり広い呼称になっていた時期もあったようである。

古語に、「ヨホロ」という言葉がある。和名抄に「膕(ヒカガミ)」、和与保呂、曲脚中也」とあるが、「ヒカガセミ」とは「膝の窪んでいるところ」（広辞苑)をいい、今昔物語にもこの文字が登場する。和名抄とは倭名類聚抄のことで、平安時代の最古の漢和辞典といってもよい。日本国語大辞典には、「膝の裏の窪みをヨホロと呼ぶことから、川や山の屈曲点など読んだもの・・・」とある。養老川が有数な蛇行の多い氾濫河川であったことから、養老川流域の呼称が「与宇呂」であるという説が有力である。

養老川という川の呼び名は、江戸時代末期になって見られるようになる。それまでは、上流下流にわってそれぞれの呼び名があり、単に川とか大川といったようで、それだけで日常的には通用したのであろう。市原市史別巻や、市原郡誌に記載されているものによると、五井川・飯沼川・用呂川・烏宿川・勇露川・手綱川・加茂川と称したようだ。古語「ヨホロ」は、長い年月とともに「ヨウロ」・「ヨウロウ」となり、その意味や区別も分からなくなっていき、いつのまにか「養老」という漢字を当て字にしたと考えられている。明治の町村合併制度で、養老という村名も誕生した。

## 3　松崎館と東条氏について

### (1)　松崎の春日神社の由緒から

「日本城郭体系」に、「土宇付近にある城郭とは、北から新堀字塙台、武士堀ノ内・腰巻・磯ヶ谷字塙台・城出下・松崎字的場・堀合、そして土宇となり、南に川在本郷・木岱などがある」とし、土宇砦をあげて関連して続く大地の小字大城・大城台と東林寺について触れている。土宇砦とは、集落に隣接して東側にある玉崎神社が祀られている独立小台地にある。市原郡誌にも、口碑伝説として「鎌倉の枝城」として記述がある。また市原郡誌の「養老村・春日神社の項」に、「舊本記曰く、上総国養老柵市西荘松崎～大和国添上郡三笠山春日四所大明神を此の地に遷し勧請奉る～毎年九月十五日をもって祭典執行神前に於いて天下泰平穀豊穣祈禱あり、其の後**東条氏の**南総を領するに至りて代々の渇仰浅からず、神社の結構美観を極むと云ふ、(因みに記すこの時の遺跡大城馬場的等の名今に現存す)、斯のごとく霊社たりしとぃへども、物換り星移り数百年を経て、神輿頽廃し小祠に存するのみ」。とある。遺跡の地として「大城」があり、同時代の頃であるといってよい。大城は鎌倉の枝城として伝わり、丘陵に隣接して字堀ノ内が存在している。「千葉の城郭」としては、土宇砦の領域として取り扱っているので、戦国期のような縄張りをもった山城ではないといえるようだ。字堀ノ内があるように、もともとこの地を根拠地にしていた領主の館があった地という説もあるが、詳しいことは分からない。今でも、二日市場とか土宇

の地の者は、字名として「大城」と「堀ノ内」の地をよく知っている。

**(2)　春日神社と松崎館**

松崎の春日神社は、字宮越に存在する。養老水系の河岸段丘上になる。市原郡誌でいう松崎の春日神社とは、養老小学校の裏東側の社の他にはない。境内に天保 15 年狛犬のほか、円墳 4 基あることから、古墳時代には養老川と東京湾の入り江奥の地域の一つとして、古代人が活動していた場所の一つであったといえる。ここから北に 500m ほどになるか、円成寺という寺院がある。市原郡誌には、「松崎区の北方中里にあり、地坪六百十三坪日蓮宗松王山と號す、慶長十八年葵丑三月本院日念聖人の開基創建する處なり」とある。周囲に堀合・的場といった地があることから、円成寺を中心としたあたりが館跡であろうといわれている。寺院の周囲を歩くと、堀切を想わせる処があったり、台地の先端で下は水田が広がっている。台地の縁の入口には石碑があったり、古道があったとも想われ縁に沿った先は、春日神社の参道下に通じる。境内の墓地に、ひときわ目立つ東条家という墓石がある。養老の地のみならず、近隣の集落には、東条という姓が少なからず存在する。

**(3)　東条氏の出自と鎌倉幕府執権北条氏**

房総でいう東条氏とは、長狭郡域東条郷の武士である。源頼朝の挙兵から石橋山からの脱出、房総上陸から鎌倉幕府創立まで房総の武士たちは、このことに大きく関わってきた。安房の武士を代表するものとして、古くからの安西氏・金余氏・丸氏、そして東条氏がおり鎌倉時代の幕府の御家人として知れる。長狭の地は、もともと国造を祖とする長狭氏の根拠地であったが、安房に逃れた源頼朝は、房総の武士を味方につけ旗揚げを共にした。その後一塊の土豪であった東条氏が、長狭の地で基盤を築いていったのだ。長狭郡は、江見地区を除いた現在の鴨川市をいう。鎌倉幕府創立とともに三浦氏の勢力下にあったが、三浦氏滅亡により北条一門の名越氏が、東条郷へと進出した。その後東条氏は、北条氏との結びつきを深めていったにちがいない。記録文書から、長狭の武士で東条景信という人物が、北条重時の家人となって幕府の中で重要な位置にあったことが分かっている。北条重時という人物は、執権北条泰時の弟である。幕府の職名で、公文に連署する重責を担っていた。松崎郷の春日神社の「舊伝記が言う由緒」に記載のある東条氏とは、この一族で長狭の東条氏であることは間違いなさそうであるが、詳しいことは何も分からない。春日神社に隣接する松崎公園近くには、三軒の東条という姓の家がある。得宗家の家人の家臣は、御内人と呼ばれしばしば北条氏の守護所に派遣されたという。得宗家の家政を取り仕切る最高責任者は、内管領と呼ばれ後年鎌倉末期になると、長崎円善のような権力者も出現した。戦国期になると一時期であるが、南総の地である内田・池和田に長崎氏一門の後裔になるのであろうか、その名が出現する。

**(4)　土宇郷堀内からみえること**

執権である北条氏の得宗政治(北条氏の家督を継ぐ者の称号といってよい)始まってから、北条氏一門が上総の国司を歴任する。現三和地域といえる所は、北条氏の所領となった。北条氏の所領は、鎌倉に置かれた家政機関の公文所によって中央集権的に管理され荘園事務を司った政所から、被官(家人)が派遣されたことが金沢文庫文書からわかる。市原郡誌に記載される松崎の春日神社の項の「舊本記」にみられる、**東条氏とは北条氏によっ**

**て派遣された代官**であったのではないかと考えられる。残された金沢文庫文書には、土地の荘官に現地の領主の人々(守護・地頭の**地頭とは**現地という意味)が採用されず、対立した事例も窺われているという。房総は、鎌倉に近いこともあって、北条氏の所領の中でも重要な地では支配は強力であったようだ。執権が北条氏の嫡統となっていったことを、得宗政治という。土宇に関することが金沢文庫文書にみられる。**「土宇郷内田田畠寄進状案内」(嘉暦 3 年(1328)12 月 13 日)**とあり、鎌倉時代末期の文書である。「内田畠」は、堀之内の文字が脱落している。土宇郷堀ノ内とは、東林寺のある峰近くに字名として残る集落の地であろう。文書の冒頭に「上総国土宇郷堀内田畠□(野)口(等)所寄進當寺也・・・」とあるが、當寺とは**称名寺**のことであり、寄進しようとしていたのは、北条氏がこの時派遣していた代官(家人)か、土宇の**地頭領主**なのかこの寄進状だけではよく分からない。文書の末尾に「案」とあるのは、今で言えば、宛てということか。称名寺の運営費用を賄うための独自の寺領というものがあった。所領である「与宇呂保」の年貢を書き上げた一連の文書も残っている。

## 4　鎌倉街道がつないだ中世文化

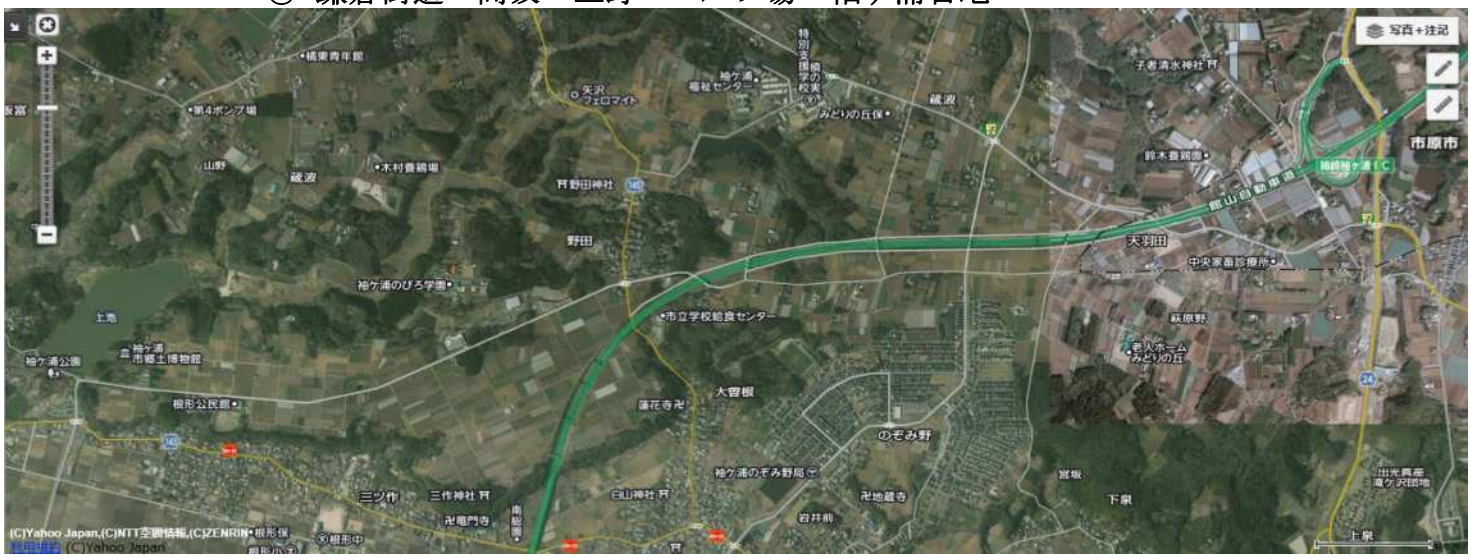
戦後まもなくまで、高坂の台地から自転車で木更津方面へ抜けていったように、古地図には古道を残す。古地図を見ても分かるように、古道は高坂の急斜面から立野・今富～海保・姉崎方面、分目・神代・引田方面、安須・山田・二日市場方面そして中高根・上高根と枝分かれする。古道には、古代火葬墓が点々としてあり、跡川原井廃寺跡・萩ノ原遺跡・古代集落跡、その先には、今富廃寺跡・郡衙・上総国分寺・国府方面へと、姉崎神社と・・・・古代からの重要な拠点があることから官道になっていたにちがいない。平安時代末期まで上総介広常一族上総氏の勢力圏であり拠点であり、宝治合戦以前までは鎌倉幕府の重要な地位にあった上総氏と祖を同じくする上総千葉氏が領有する地域が上総国であったことからも、鎌倉街道は以降ずっと重要な街道であったにちがいない。鎌倉街道は、「いざ鎌倉」という軍用道路としてのみならず、その時代の沙石集や廻国雑記や金沢文庫文書に見られるように、年貢の輸送や商人、修験者といった諸国を巡り歩いていた人々や仏師とか芸人といった人々と物資が行きかい、各地から鎌倉の地を通した文化の息吹も伝わってきたにちがいない。平安時代に入ると各地で自立していった領主が、信仰し自分の村を象徴する仏像を安置した寺院を建立した。そのことを、今に伝える痕跡をみることができる。海保森厳寺の木造千手観音菩薩坐像(南北朝時代、鎌倉期の仏像の様式)・引田の蓮蔵院の木造不動明王(11 世紀頃、平安時代末期)・宮原の円満字(木造不動明王(南北朝時代)中高根の常住寺の五輪塔や宝篋印塔と板碑(観応という年号から、鎌倉幕府が滅んで 20 年後)・風戸の日寺木造聖観音立像(11 世紀前半頃)・上高根の称禮寺木造薬師如来坐像及び両脇侍立像三躯(平安時代後期か)・武士の法泉寺の木造聖観音菩薩及び二天立像(建長 8 年とあることから、鎌倉時代中頃・二天像は平安中期頃か)・栢橋の医養寺の薬師如来立像・・・等が存在している。このことは鎌倉街道は、地方の領主とあるいは遠く都とつなぎ、仏師とともに信仰が時代の文化を運んできたにちがいない。仏教が奈良・京都の貴族たちの一部信仰から、中世になって地方のより多くの人々への信仰対象になっていったこ

とも垣間見ることもできよう。

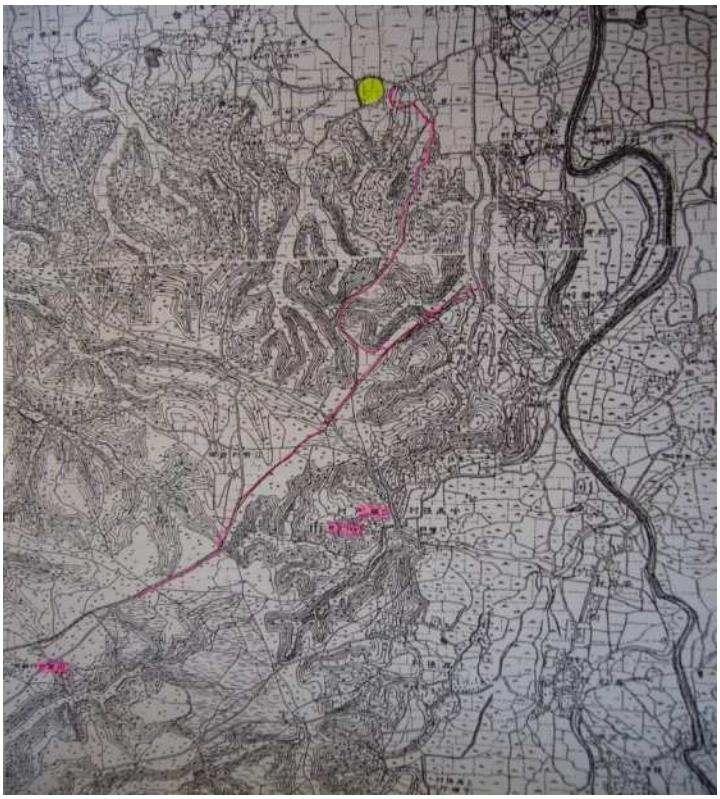
資料の一部から

① 鎌倉街道　　立野交差点～ゴルフ場～袖ヶ浦台地入口

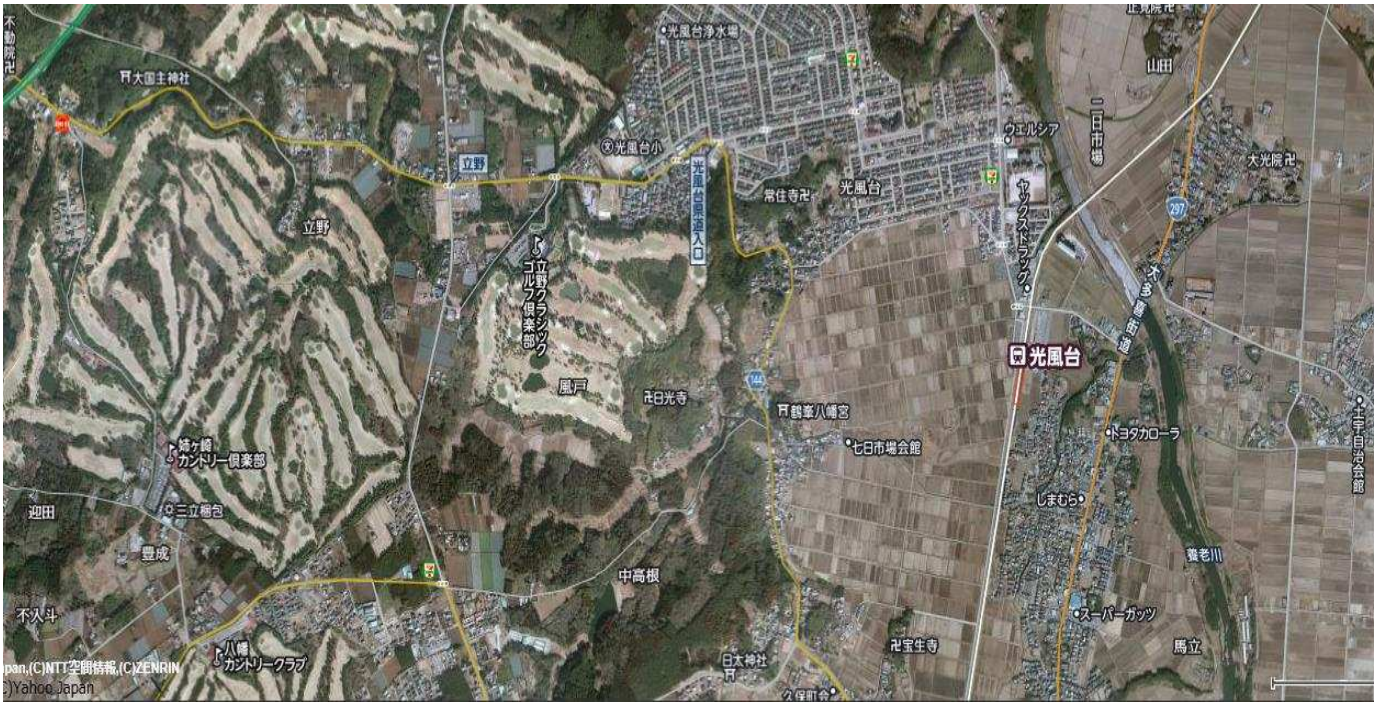
② 鎌倉街道　高坂・立野～ゴルフ場～袖ヶ浦台地へ



③ 鎌倉街道　　高坂から枝道となる古道



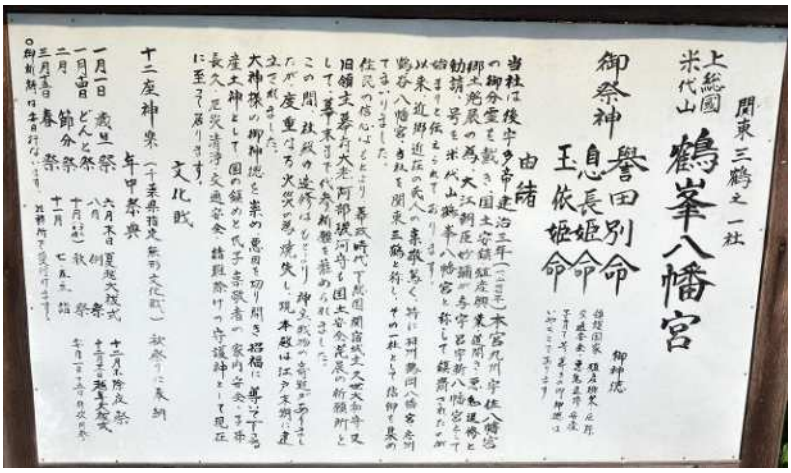
④ 鎌倉街道の枝道　（寺の下）常住寺～風戸の日光寺～鶴峯神社方面



⑤ 鶴峯神社の由来・・・鳥居の脇にある案内板と二日市場・土宇付近の養老川の曲流跡

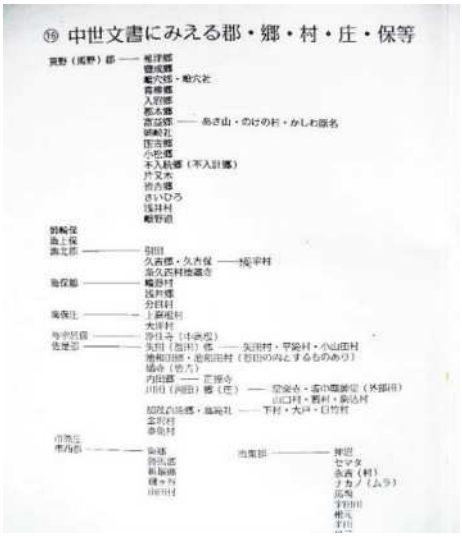
保とは・・・中世文書からみる

・鳥居の脇にある案内板




・二日市場・土宇付近の養老川の曲流跡

・保とは・・・中世文書からみる



⑥　金沢文庫文書より

三三七　上總國土宇郷内田畠等寄進狀請取狀案

○金澤文庫文書

（端裏書）「きしん狀請取案文」

上總國土宇郷堀内田畠山□□（野等）所令寄進當寺也、依□□約之旨、用途可致沙沙□（候）、□（若）無御免許者、可返進御□（寄）進狀、仍如件、

嘉暦三年十二月十三日　□

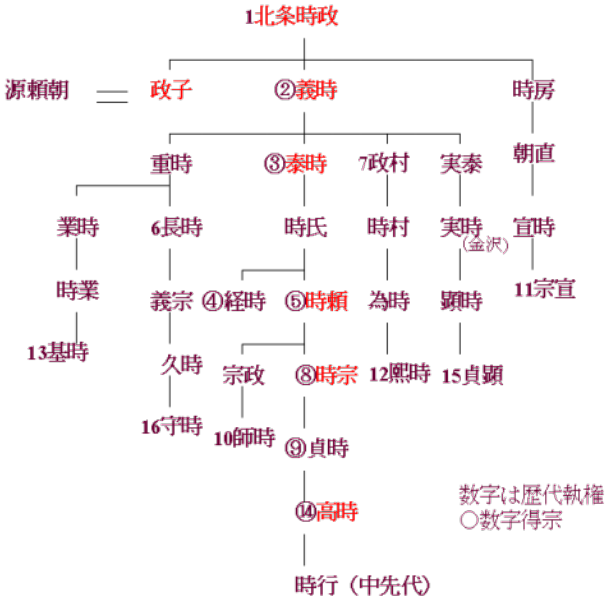
三九八　上總國與宇呂保淨住寺祈禱料所寄進申狀案

○金澤文庫文書

上總國與宇呂保淨住寺安置千手像、爲覺園寺之末寺、自草創至于今七十余年久修練行積年、護持禁戒得時、爰建武五年、賜御教書、抽無二之精誠、將又貞和六年二月廿一日、重依被成御祈禱之御教書、云長日、云臨時、彼此雖致御祈禱精誠、未預一所供祈、然早預御寄進、至于末代可奉祝椿壽之榮者也、仍粗言上如件、　在判

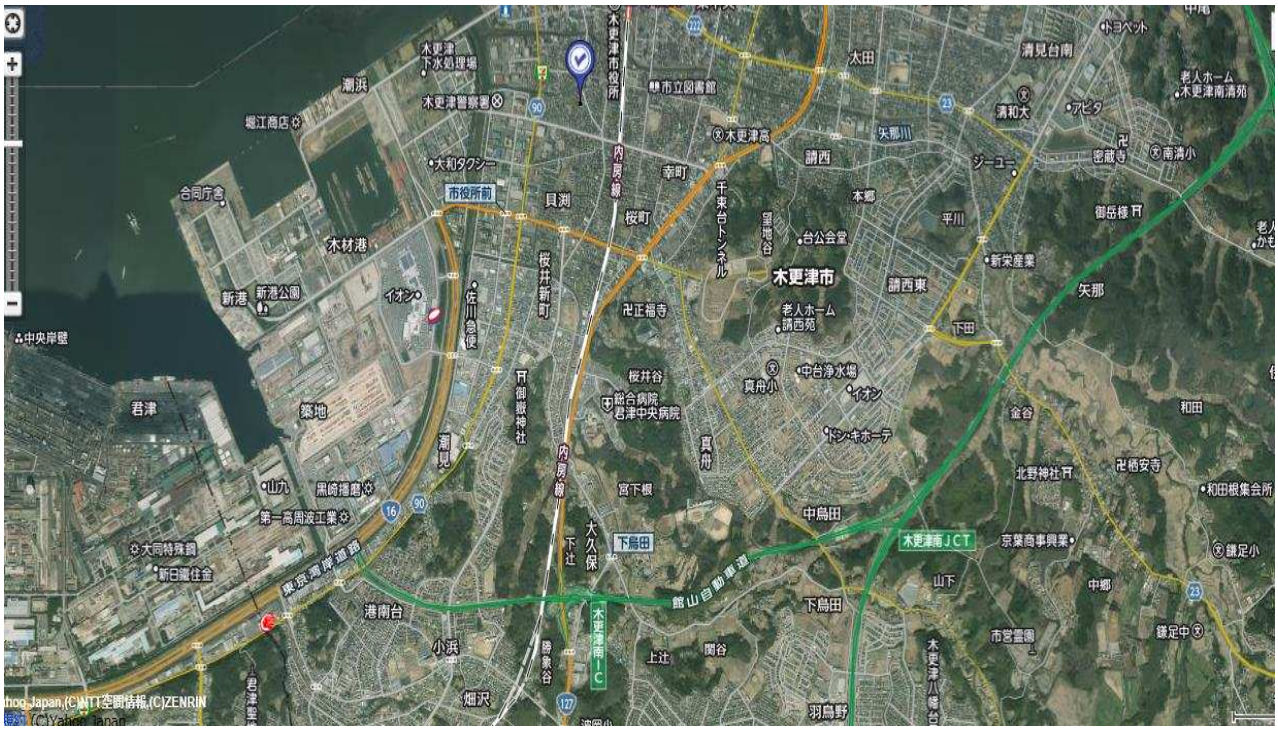
觀應三年八月三日

六浦と北条氏系図

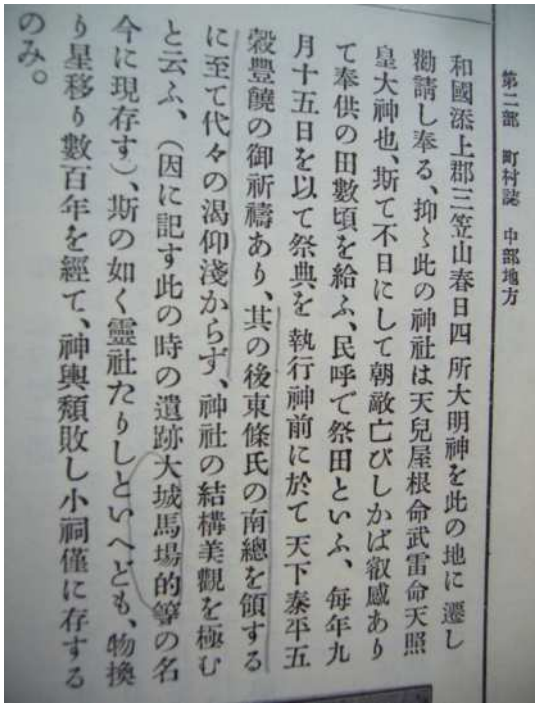



⑦　中烏田のみちしるべ

⑧　空撮　現在の烏田～貝淵（渡海面）

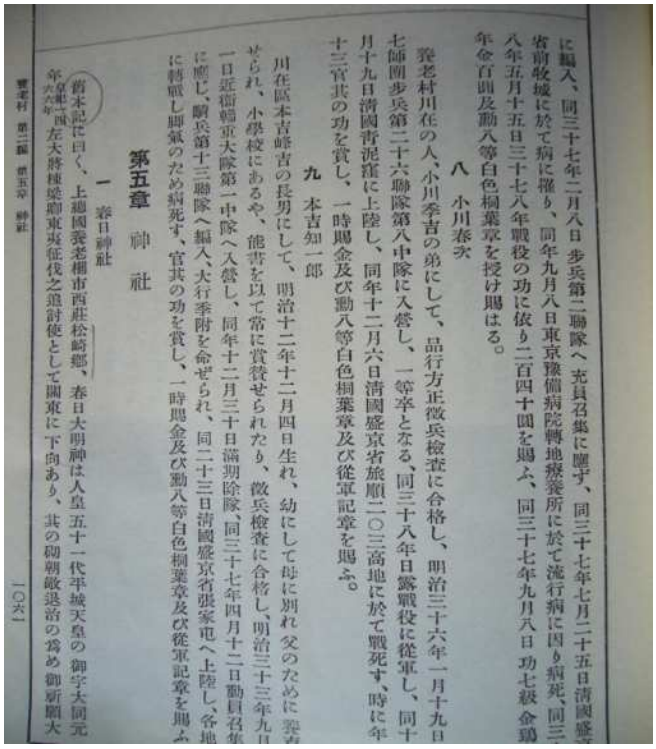


## ⑨　市原郡誌、松崎の春日神社の項から



第二部　町村誌　中部地方

和國添上郡三笠山春日四所大明神を此の地に遷し勸請し奉る、抑〻此の神社は天兒屋根命武雷命天照皇大神也、斯て不日にして朝敵亡びしかば叡感ありて奉供の田數頃を給ふ、民呼て祭田といふ、毎年九月十五日を以て祭典を執行神前に於て天下泰平五穀豐饒の御祈禱あり、其の後東條氏の南總を領するに至て代々の渴仰淺からず、神社の結構美觀を極むと云ふ、（因に記す此の時の遺跡大城馬場的簿の名今に現存す）、斯の如く靈社たりしといへども、物換り星移り數百年を經て、神輿頽敗し小祠僅に存するのみ。



に編入、同三十七年二月八日　歩兵第二聯隊へ充員召集に應ず、同三十七年七月二十五日清國盛京省前牧城に於て病に罹り、同年九月八日東京豫備病院轉地療養所に於て流行病に因り病死、同三十八年五月十五日三十七八年戰役の功に依り二百四十圓を賜ふ、同三十七年九月八日　功七級　金鵄年金百圓及勳八等白色桐葉章を授け賜はる。

八　小川春次

巽老村川在の人、小川季吉の弟にして、品行方正徴兵檢査に合格し、明治三十六年一月十九日七師團歩兵第二十六聯隊第八中隊に入營し、一等卒となる、同三十八年日露戰役に從軍し、同十月十九日清國青泥窪に上陸し、同年十二月六日清國盛京省旅順二〇三高地に於て戰死す、時に年十三官其の功を賞し、一時賜金及び勳八等白色桐葉章及び從軍記章を賜ふ。

九　本吉知一郎

川在區本吉峰吉の長男にして、明治十二年十二月四日生れ、幼にして母に別れ父のために巽老せられ、小學校にあるや、能書を以て常に賞賛せられたり、徴兵檢査に合格し、明治三十三年九月一日近衛輜重大隊第一中隊へ入營し、同年十二月三十日滿期除隊、同三十七年四月十二日勳員召集に應じ、騎兵第十三聯隊へ編入、大行季附を命ぜられ、同二十三日清國盛京省張家屯へ上陸し、各地に轉戰し脚氣のため病死す、官其の功を賞し、一時賜金及び勳八等白色桐葉章及び從軍記章を賜ふ

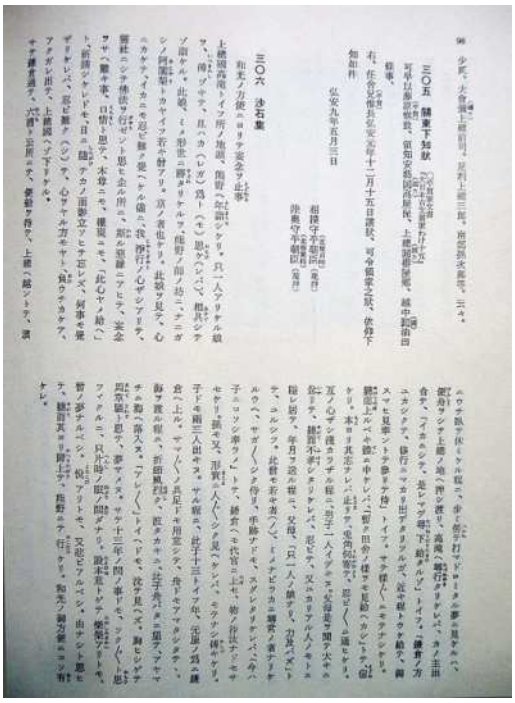
第五章　神　社

一　春日神社

（舊本記に曰く、上總國巽老郷市西莊松崎郷、春日大明神は人皇五十一代平城天皇の御宇大同元年六月十日左大將種榮卿東夷征伐之追討使として關東に下向あり、其の砌朝敵退治の爲め御所願大

巽老村　第二編　第五章　神社　一〇六一

## ⑩　沙石集と廻國雑記について



#17 廻国雑記

入った。9月初めに房総半島から三浦三崎に渡り、鎌倉に着くが、ここで記述が突然日光山、筑波山参詣に飛ぶ。その後、江戸から陸路鎌倉を再訪したのは10月上旬である。神奈川県域では、鶴岡八幡宮、鎌倉五山、金沢称名寺を見て、藤沢遊行寺、大磯、小田原、箱根と西に進んだ。伊豆・駿河を回って足柄峠から再度相模に入り、大山寺、日向薬師等に足跡をしるしている。このあと道興は武蔵・甲斐を回り、関東を北上し奥州路に入る。遠く松島まで足を伸ばし、帰途名取川(仙台市)のほとりで紀行は終わる。ここまで20か国の旅である。帰路の記録はないが、他の史料によれば道興は文明19年5月19日、京都に帰還した。

### 諸　本

原本や古写本は伝わらず、群書類従本など江戸時代の版本やその写本が現存する。版本のなかには『宗祇廻国記』などの書名で、連歌師・宗祇を著者とするものもあるが、江戸後期に関岡野洲良(せきおか・やすら)は初めて本格的な注釈書『廻国雑記評註』を著し、宗祇著者説を誤りであるとした。